

しかしながら、無痛文明へとひた走っていく流れのなかで、われわれはけっしてこころの平安を得ることはないであろう。それどころか、逆に、われわれは何かわけのわからない不安におびえ、なんともいえない暴力衝動に襲われるようになるだろう。無痛化に加担するすべての人々を刺し殺してしまいたい衝動にかられることだろう。なぜなら、われわれの内部には、まだ「生命」の反抗力がしぶとく生き残っているからである。

だが身体の欲望は生命の反抗を難なく押さえ、無痛化に向かう流れをさらに促進する。われわれの生命は徹底しておさえ込まれ、われわれは身体の欲望のあやつり人形となる。身体の欲望につき動かされるわれわれは、みずからの枠組みを壊すかもしれない本物の苦しみや本物のよろこびを避けようとする。その結果として、われわれは「本物の苦しみを避けつつ仕組まれた 冒険や逆境を追い求め、本物のよろこびを避けつつ 快と刺激 を追い求める」という営みに駆り立てられるようになるのだ。具体的には、カルト宗教へ没入する、恋愛に駆り立てられる、性愛に没頭する、ドラッグにはまる、進んで冒険に身をゆだねる、トラウマをみずから刺激する、動機のない暴力をふるうなどの行為に陥っていくであろう。それらの行為は、その場かぎりでの快刺激や癒し感覚をもたらずが、けっして長続きしない。その結果、新たな刺激を

求めて、人々はあてどなくさまようことになる。そして、刺激に満ちたいまの状態が、なぜ絶え間のない不安にいろどられているのかという根本的な問いから、きわめて用意周到に目をそらし続けていくのである。

（書籍版に続く・・・）